死を前に生きた

死を前に生きた

大川福松
（旧姓・高橋）

280003

I313.55
J1321

「死を前に生きた」

発行　昭和五十五年　八月　十五日

著者
発行者　大川福松（旧姓・高橋）
群馬県新田郡薮塚本町大字大原三六九

印刷　オグラ印刷
桐生市境野町六丁目一五四〇

定価　二、五〇〇円

I313.55
J1321

発刊に当りて

発刊に当って、この本は小説ではありません。日本国始って以来の敗戦と云う現実の下に日本の関東軍の将兵がソ連に捕虜となり何千何万の死者を出した事実を目の当りに見てけんこん一滴ふんきして、若干二十才から二十三才の私の青春時代の思い出を、現在の世界の状勢からすべてを感えて敢て世に発表するものです。

今思うのは敢全武装なくして日本の自主外交はありえないとはっきり云った前大来外務大臣には私は敬意を表します。世界を見た時、米ソだけが世界を二分して居る中に一国だけ戦後今日まで敢全中立を三十五年間、今日までやって居るスイスは、世界の金が集って世界的な国としての信用を得て居るのは事実である事を大方の諸賢は御存知と思います。人間として生と死の極元状態の中に立たされた時、私は、織田信長ではないが、死のうは一定誰でもどんな人でも必ず一度は死すと云う事、其の人〳〵によって、死に方は色々ありますが、死に対しては一つの定であると思い心も軽々死に直面しても動じない、不動心を理解する事が出来ました。

私は、この本を敗戦記念日に発刊するに当り、日本人に未来の夢を描く前に世界の現実に目を向けて、今の日本のなにを一番先にやり、将来にむけてなにを成すべきかを真剣に感えて貰い度いと思い世に知られぬ、現実にシベリヤであった事を発表し、この本を読まれる諸賢の一考を伏してお願い申し上げます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

発刊に当りて……
終戦からオペまで……3
赤軍五二〇大隊編成ハラゴンへ……6
ハラゴンからキルガへ……17
再度赤軍五二〇大隊の当番となる……32
ネルチンクスよりクイブシェフカへ……33
フルシチョフとの出会い……36
始めての糧秣の買付けと壁新聞の第一回発行と日本新聞の発刊について……46
カタカナサークルの実施……50
赤軍第二軍の車輌を路上に止める……54

赤軍兵士の一ケ月重営倉の刑を三日の減刑に頼む……56
ハバロスク短期大学の創立と日本新聞の画期的大出発……63
感電死と墓地問題……87
スターリン胸像の彫刻……93
ストライキ決行……94
六十五名選別復員……108
スターリン像仕上る……111
アクチェブ遂に帰って来る……113
コルホーズの馬鈴薯掘り……114
第一回人民裁判（私に対する）……116

復員のための誓約書の件と建築作業の検収の件……129
啓蒙活動のやり方の批判と復員許可……140
フルシチョフとの政治と今后に対するソ連の政治裏面の件に対する討論……146
復員日決定発表……156
カタカナサークル壁新聞、フルシチョフとの別れ……165
復員、さらばクイブシェフカ　いよいよ出発……185
いよ〳〵上船出発……189
船上で斗魂と鎮魂歌……192
待望の三年間、待ちに待った上陸第一歩……199
あとがき……214

死を前に生きた

今迄、知られざる極寒の地、シベリヤの捕虜生活の記録である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

終戦からオペまで

昭和二十年八月十五日、日本国始まって以来という敗戦降伏に関して天皇陛下おんみずから国民に対し御放送なされたことは我々兵隊には知らされなかった。我々兵隊には十五日より出動準備という命令がおりていた。この日、満州国奉天の空は晴れていた。そして十八日出動の命令が下り、各小隊は分隊別にトラックに乗車して市内を暴動から守るため巡回を行ない、ロスケに発砲するようなことは起こさせるなという命令であった。出発して途中、町中の至るところで目にあまるものを見た。ロスケの兵隊が日本の婦人を四ツンバイにして後ろから犬の交尾の格好でこれみよがしにやっているのを見て私は機関銃を向けた。時に小隊長より、

「打つな」

と止められて戦いに敗れた日本軍の姿のなんと哀れなことかとソ連兵に唾をぶつける思いであった。巡回を終えて帰営したが、このようなことが一週間も続き、八月二十七日準士官以上はそのままで兵士のみ武装解除せよの命令が出て完全武装解除させられた。それは奉天の東陵に宿営していたときのことである。

明けて九月一日。私は未明より下腹部が痛み出して一週間たっても治らず十日になった。同日部隊を異動させるとの野呂中隊長命令がでて、

「病気の者もかまわず汽車にのせろ、若し途中で死ねばそのとき車外に捨てる。捨てれば狼が食べてくれるだろう。かまわぬ連れてゆけ」

と中隊長野呂中尉の命令であった。私は、

「よく忘れぬぞ今に見ておれ」

と心からその冷たさにきっとしたものを誓ったものの、腹痛は治らない。結局、十五日朝五時に部隊は移動して我々五、六名の病人を残して出発した。私達は十時北陵の野戦病院に入院した。

「即日午後一時からオペを始める」

と通達され、青木軍医大尉の執刀により手術を受けて虫垂が見つからぬといい乍ら眼を開けたら自分の腸が腹の上に一杯出ており、これが私の腸かと始めてまざまざとみた。手術は三十分かかった。十五日の間一合入りのコップに二杯の水だけで生きてきた私の腸は腹の上で平になっていた。このあと喉がかわくので水が呑みたくて午後三時に水道の蛇口まで約四米程這って呑もうとした時に、青木大尉殿に見つかって叱られもどされた。しかし

喉のかわきはなんとも我慢ができず、二回目、三回目と這い出し三回目は必ず果すと心にきめ死んでもよいという気持で音のせぬよう三十分位かかってやっと辿りつき、野菜缶の中へ手を入れてみると水だったので息をひそめ、この世に思い残すことはないという気持で三十分以上呑んだ。ペシャンコの腹がふくらんで体中が猛烈に焼けてきたのでパイプを頼りに外に出たところに九尺直径のマンホールの上に一寸位の雪が積っている上に素裸のまま寝ころげ廻った。鉄条網の外にソ連兵の兵隊が立哨して居るのが見え、二回交替が終るのを見守り、四時半頃まで体を冷して自分の病室へ四つんばいでぐるぐると廻って帰り着いたのが午前五時。便器と尿器に二杯小水を出して床上に捨てたうえ、又二杯した。朝六時の起床で斉藤上等兵に見つかり軍医に報告され、三人の軍医が立合って小便の原因がわからず実に体調はよく快調になったことで軍医は首をかしげ、面白く痛快だった。そうして十六日の朝食は普通食で一人前をペロリと平らげ十時半、上等兵がベットの下へ五個程餅をついたのを持って来て入れていたのをそっくり頂いた後、昼食を又一人前食べる。十七日も十六日に同じく普通食で十八日には病院が転院になり学校へ入れられて看護婦もつき、こりゃァよかったと思い便所へ一人で行って帰りに見つかり叱られて今度は重湯を二合にされ、一週間は実にひもじい思いをさせられた。

赤軍五二〇大隊編成ハラゴンへ

十月二十四日命令が下り退院と同時に赤軍第五百二十大隊に配属され、二十五日第六小隊に編入される。二十五日午後三時半、奉天駅にて貨車に乗り、二十七日チチハル駅に着き三十日まで停車して夜中に出発、十一月五日夜走っては昼間はとまって十一月七日チタに着き目的地はもう近いと知らされ始めて見るシベリヤの広野は文字どおり白一色である。

十一月八日ハラゴンに到着し作業は伐材作業とのこと、いよいよ生地獄が始まった。赤軍五百二十大隊は日本軍将兵五百人、ソ連兵将校ノ下士官と兵二十名から成り、毎日毎日

「ダワイ〳〵」

と仕事をさせられて一週間目には食事は当初の約半分、一ヶ月後には飯盒のフタ一杯その中に大豆四十八粒若しくは大さじ一杯九十三粒、これが一日の吾々の食事で栄養失症で倒れる者は三分の二以上、ときに日本軍の将校は白米食で一人一人が食べきれず飯を外に捨てたのを野良犬よろしく兵隊は凍った飯を拾って食べて寒さと飢に故郷恋しと男泣きに皆

泣いた。だが戦争に敗けたのだから致し方なく何時かいつかきっと帰れる日を待とうといっているうちに俺は忘れもしない二十一年二月四日午後四時三十六分、発診チブスのため気を失ない気がついた時には床返りも出来ず手が上にあがらぬ程衰弱して何も出来ず吾ながら人生の終りと思い乍らも忘じ難い父母の夢などに励まされて早く丈夫になりたいと思い乍らも食べるものはなにもなく、二月二十五日午前七時に気付いて、隣りにいた坪井にいろいろ聞いたが全くどうにもならない状態にあることだけしかなく、それからは無理して動く練習をしてみたがやはり気持だけではどうにもならない。

二月が過ぎ三月十四日夜、岡安通訳がソ連軍の命令を伝えた。

起きているものは一人もおらず毎日毎日一人死に二人死に鳥の泣かぬ日はあっても戦友の死なぬ日はなかった。地獄の生活とは、げに、明日への希望のない毎日のとたんの生活を腹の底から味わった。

「命令、明十五日ソ連軍の将校がチタの軍司令部より調査にくるから何を聞かれても一、食事は一人一人のノルマだけ戴いておりますと云え若し命令に背いたものは即日銃殺にするからよく覚えて置くように。必ず命令を守るように」

私は、

「私は死んでもそんな嘘はいえぬ必ずいってやる殺されてもよい」
といったら岡安さんは、
「高橋、いいたくても我慢してくれ、そうでないと日本に帰れないぞ」
と悲痛な面持でいった。私も止むことなく、
「あゝ解ったよ」
岡安さんは伝えるとお休みといって帰って行った。
私は明日こそ死ぬる日だ高橋の命日だと思い乍ら床についた。翌朝、驚いたことに食事が米食とパンと汁と一週間分が一食とは!!。飯盒の中にこれを半分残していつまた支給されるかわからないと思い乍ら亦眠る。と、十時頃皆起きているようにと岡安さんが廻って来て、
「十一時頃チタから順視官が来て食糧をどの位貰って食べていると聞くから今朝食べたとおりに貰っておりますと答えてくれるように」
といって帰った。それから約一時間もしないうちに到着した話があり急に扉が開いて赤軍大佐が来た。私は余りにもひどいことをいう奴はこれかと思い大佐の顔から眼を離さずみぢろぎもせず凝視した。私の目の前五尺位の所で止り、流暢な日本語で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.